

日韓発掘調査交流に参加して

奈良文化財研究所は韓国国立文化財研究所との研究交流協約書にもとづき、国立慶州文化財研究所と発掘調査交流合意書を取り交わしています。私はこの発掘交流のため、2012年9月3日から11月2日まで韓国慶州市に滞在し、新羅支配者層の墓群であるチョクセム古墳群、新羅の王都である新羅王京遺跡、そして統一新羅の代表的寺院として著名な四天王寺跡の調査に参加しました。

積石木槨墳^{つみいしもつかくふん}という新羅独特の墓制に特徴をもつチョクセム古墳群41号墳、建物や塀の跡が増改築をともなって複雑に展開する新羅王京遺跡、いずれも私にとっては難解そのものでした。それでも、調査スタッフの方々の説明をうけ、様々な作業をこなすうちに、自然と体が遺跡に馴染んでいくような感覚をおぼえたことが思い出されます。これは遺跡の見学だけでは決して味わえないことです。四天王寺跡では、亀趺^{きふた}(亀形の石碑台座)の調査に参加し、亀趺周囲の構造物を調査スタッフと議論を尽くしつつ検出できたことが、交流を通じてのもっとも貴重な経験となりました。

こうして発掘交流生活に慣れていくうちに、発掘調査の基本的な考え方や方法に大差はなくとも、調査過程の個別的状況への対応やその手順等、細部には多くの違いがあると感じました。それらは一長一短、文脈による善し悪しにも思えます。しかし、私たちが発掘現場で当然のごとく考えている事柄を、新鮮な気持ちで見つめ直す機会を得たことは、私にとって最大の収穫であったと思っています。

発掘交流で学ぶことは人それぞれですが、それはこうした機会があつてのこと。今後も発掘交流が続き、日韓の研究交流に重要な役割を果たしていくことを願っています。(都城発掘調査部 森先 一貴)



新羅王京遺跡での実測作業